

北方狩猟採集社会の今日的展開

学位論文内容の要旨

本論文ではカナダ、ユーコン準州ワトソンレイク地域における北方狩猟採集民であるカスカの生活に関する詳細なデータを、人類学的視点から経験的観察方法によって記載することを第一の目的とした。さらに、狩猟採集民カスカの TEK (伝統的生態学的知識) と狩猟・畏猟の時間・空間利用の関係、狩猟・畏猟活動を通じたカスカの動物観、そして近代国家における狩猟採集民としての今日的展開についての分析と考察を行った。このため 2004 年～2005 年まで、約 4 ヶ月間にわたりカナダ国内のアルバータ大学周極研究所、プリティッシュ・コロンビア大学等の研究機関で文献の収集や研究者との面談により研究拠点を確定し、2005 年 9 月、2006 年 3 月～5 月、2006 年 7 月～2007 年 1 月、2007 年 5 月から 8 月にかけて、計 13 ヶ月間のフィールド調査を実施した。

第 1 章では、研究の目的と先行研究を示し、狩猟活動を通じた人間と動物の関係についての研究の意義、狩猟採集社会における TEK や自然資源の利用に関する今日的意義とともに、特に北方の狩猟採集民に関しては日本における研究の空白が目立つ領域であることを指摘し、一次資料の収集、記載、提示を本論文の第一の目的とした。

第 2 章では、調査の対象となるカスカの生活領域、伝統文化に関する概要、インフォーマントのプロフィールについて示し、調査地域の特徴、調査の方法と調査期間について述べ、本研究の行われた範囲を示した。

第 3 章では、カスカの人々の現代の生活における伝統文化に関する取り組みを学校教育、バンド・オフィス (カスカ組織の事務所)、ワークショップ、祭り、葬儀、芸術、音楽という項目ごとに明らかにした。そのなかで、カスカの人々が様々なイベントを通して文化を評価、維持しようと試みていること、そしてその中心にはブッシュ (森などの野生地域) との繋がりが存在していることが明らかになった。同時にこうした試みは急速な社会の変動に対応して始められたものであり、現在もどのような方法が妥当なのかを模索している状況であることを指摘した。

第 4 章では、ヘラジカ狩猟における狩猟—解体—分配—利用といった活動系全体の流れ、1 日の活動の時間・空間利用、地域、動・植物種、季節という項目ごとの TEK を明らかにした。次にビーバー・マスカラット狩猟の事例についても狩猟の全体の流れ、1 日の活動、狩猟の詳細、毛皮の処理について記載した。さらに、その他のインフォーマントによるカリブー (野生のトナカイ) やドールシープ (野生の羊) の狩猟についても記載した。

第 5 章では、罾猟活動系の概要について説明したあと、実際に罾猟活動について学んだ事例からブッシュでの罾猟の全体の流れ、1 日の活動の詳細、時間・空間利用を記載した。また罾猟に関わる TEK や技術について記載した。また動物種ごとの罾猟についてもその方法を示した。また狩猟との比較から、狩猟が伝統的、儀礼的な世界観のもとに行われているのに対して、罾猟がより経済的な活動である点について指摘すると共に、活動の空間分布が異なる点について明らかにした。

第 6 章では、ブッシュでの狩猟採集活動によって得られた資源を食料としてどのように利用するのかを、実際に食べられた事例と利用の知識として示した。次にシェアリングとして、資源がどのように分配されるのかを示し、さらに皮については加工する方法の違いからなめし皮と毛皮に分けて処理の方法や利用を明らかにした。さらに骨や植物から作られる道具、薬として用いられる資源についても記載した。

第 7 章では、禁忌・規範、宗教、物語、動物観について、項目ごとに事例を示した。この作業の中で、カスカの世界観が宗教、物語、あるいは TEK といった項目に分類することが困難なほどの緊密性と関連性をもつという特徴が浮かび上がった。

第 8 章では、本論文によって明らかになったカスカの人々の生活に関する詳細なデータをもとに、1. 狩猟採集民カスカの TEK と狩猟・罾猟の時間・空間利用がいかなる特徴をもつか、2. 狩猟・罾猟活動を通したカスカの動物観がいかなるものか、3. 近代国家の中での狩猟採集民であるカスカの人々がどのような今日的展開を見せているか、について分析、考察している。

その結果、狩猟活動の戦略が TEK と活動の時間・空間利用から成り立って入ること、とりわけ大型動物であるヘラジカの狩猟について、GPS（汎地球測位システム）による分析から、狩猟活動が常に移動する「探索」と低速度での移動もしくは移動しないと言う「待ち伏せ」という二つの異なる種類の活動の組み合わせから構成されており、これが TEK を反映した狩猟のポイントとそうでない場所に対応していることが示される。また、カスカの動物観に関しては動物観が狩猟を通した人間と動物との結びつきによって維持され、カスカの人々がカラス、オオカミというクラン動物のみならず補助霊としての個人単位の象徴動物を持つことが明らかにされる。さらにカナダという近代国家における狩猟採集民の特徴として、ブッシュと町という二つの世界があり、そこでの規範、資源利用、社会関係は異なるが、カスカの人々はどちらか片方に属しているのではなく、同じ人間がブッシュにいる間はブッシュ的であるのに対して町では町の人らしく振る舞うというように、二つの世界を同時に生きているということを指摘している。

最後に、第 9 章ではカスカ社会の急激な変化のなかで、狩猟や罾猟活動と TEK やブッシュ・スキルを体系的に記録することは、文化や伝統の保存という点においても高く評価されること、北方狩猟採集民の人類学的データの提示により、狩猟社会の研究に重要な知見を加えることができ、狩猟採集社会を総合的に再検討することができるという可能性が指摘されている。さらに今後の展望として本研究で扱わなかった動物種の狩猟・罾猟の事例についての調査の実施、進化心理学などの知見を応用した心と活動の関係に関する環境への適応という視点からの適応合理性の問題に関する検討の必要性が示された。

学位論文審査の要旨

主査	教授	煎本	孝
副査	准教授	佐々木	亨
副査	准教授	大沼	進

学位論文題名

北方狩猟採集社会の今日的展開

本論文はカナダ、ユーコン準州に伝統的な生活領域をもつ狩猟採集民カスカの今日の生活に関する経験的観察方法によって得られた詳細な一次資料の提示と、その資料に関する人類学的視点からの分析である。日本における北米狩猟採集民に関する人類学的研究は少なく、さらにカスカの狩猟採集活動に焦点をあてた経験的観察資料に至ってはカナダ国内においてもほとんどないという状況である。本研究はこうした従来の研究の資料的空白を埋め、新しい知見を提供し、北方狩猟採集民に関する人類学的理解に貢献する研究として評価することが出来る。

狩猟や罾猟だけでなくその利用や現在の社会状況についても詳細に記載、検討していることから、狩猟採集活動の位置付けが明確であり、近代国家の中の狩猟採集民としての今日的展開とアイデンティティの問題など、現代の文化人類学の研究にとって重要な意義を持つものである。また、人間と動物の初原的同一性や個人によって異なる動物との超自然的結びつきといった特徴、動物への敬虔な態度が動物への強い依存を背景として独特の動物観を形成していること、さらに活動が生態学的な知識によって展開すると共に動物観や禁忌・規範といった伝統的な世界観からも大きく影響を受けていることと、それらが動物との関係を通じて維持されていることが実際の事例の中で明らかにされており、北方狩猟採集民の生態人類学的研究に大きく寄与するものとして重要な意義を持つものと理解できる。また、本論文におけるフィールド調査から得られた知見をカスカ社会へ還元するアーカイヴ作成作業がカスカの人々と共同で進められており、研究成果の還元と言う点でも評価されるものである。

ただし、本論文における狩猟・罾猟の対象動物が限られたものであること、生態学や心理学といった隣接する領域の知見を応用した検討が十分にされていないことなど、さらに必要とされる点が残されている。しかしこれらは今後の展開として期待されるものであり、本論文が示した学問的価値を損なうものではない。本論文が示した狩猟採集民カスカに関する人類学的研究は、当該分野における今後の研究の推進に大きな意義を持つものである。